

芥川龍之介

夏目先生



夏目先生

はじめて先生に会った時、万歳ということをして人の中で言ったことがあるか、ないかという話が出た。で僕は、一度もないと言った。そうしたら先生は、誰かの結婚式の際に、万歳という音頭をとってくれと頼まれて、その時に言ったことがあると言われた。それからそのほかに、よくは覚えていないが、二三度あるという話であった。その時、なぜ万歳というのが言いがたいんだらうという話になって、先生は、人の前で目立つことをするのは極

りが悪いからだと言う。僕は、それもあるでしょうが、
いったい万歳という言葉が、人間が興奮して声を出す時
に、フラアという言葉のように出ないで、万歳という言
葉の響きが出にくいからなんだろうと言った時、それを
先生は断固として認めなかった。それを僕が強情に言い
張るもんだから、先生は厭な顔をして黙ってしまって、
僕はへこたれたことがある。それ以来、どうも先生に反
感を持たれているような気がした。

*

ある時、僕が、志賀さんの文章みたいなのは、書きたくても書けないと言った。そして、どうしたらああいう文章が書けるんでしょうねと先生に言ったら、先生は、文章を書こうと思わずに、思うまま書くからああいうふうに書けるんだらうとおっしゃった。そうして、俺もああいうのは書けないと言われた。

*

往來を歩いていたら、荷車の馬が車を離れて追いかけて来た。で、逃げ出してよその家へ飛び込んだことがあ
るけれど、その馬は自分をほんとうに追いかけたのか、
外の人を追いかけたのか、いまだに分らないと言われた
ことがあった。

*

正岡子規が「墨汁一滴」だかなにかに、先生といっし
よに早稲田あたりの田圃を散歩していた時、漱石が稲を

知らないで驚いたということを書いてある。そうして先生とその話が出たことがあった。そうしたら先生が言うのには、いや俺は、米は田圃に植えるものからできることとは知っている。田圃に植っているものが稲であるということも知っている。ただ、稲——目前にある稲と米との結合が分からなかっただけだ。正岡はそこまで論理的に考えなかったんだと、威張っていられた。

*

ある晩のこと、みんなが先生に猛然として、論戦を吹きかけた。僕はなんとも思わなかったけれども、久米が気にして、あんなに先生に戦を挑んでいいのだろうか。小宮さんに聞いた。そうしたら小宮さんが、先生はあれが得意なんだと言った。皆に食ってかかせて蹴ちらすのが好きなんだと言った。

*

エリシエフ君が先生に、先生の物を翻訳するのに、「庭

に出た」というのと、「庭へ出た」というのと、どこが違うかと言ったら、先生は、俺も分らなくなっちゃったと言っておられた。

*

タガヤサンのステツキの話。鈴木さんが、先生の小説の中にあるタガヤサンのステツキの話を見て、タガヤサンは堅い木で、とてもステツキなんかに切れる木ではないと言ったら、先生が真面目な顔で、でも今は鉄さえも

切れる機械があるのに、タガヤサンの木が切れないはずはないと言った。

*

安井曾太郎の画を見て、先生は細かさがちようど俺に似ていると言われた。

*

先生はちよつとしたことでよくおこつた。僕が一ぺん
こういう話をした。人から聞いた話で、高楠順次郎が、
夏目さんなんか大学にいるよりも、外へ出て作家になつ
たほうがよかつた人だということを書いていたという話
をしたら、先生はたちまちムツとして、俺に言わせれば
高楠こそ大学にいないほうがいいんだと言つた。

*

先生が銭湯に入っていたら、傍にいた奴が水だか湯だ

かひっかけた。先生はムツとしてその男を取っつかまえて馬鹿野郎と言った。言ったがすぐにその後で怖くなつてどうしたらいいかと思つていたら、いい幸に向うがこっちの劍幕に驚いてあやまってくれたんで、俺も助かったと言つておられた。

*

夜、どっかに火事があつて、先生、火事を見に行つて歸つてきたら、刑事が非常線を張っているのに引つかか

ってしまった。刑事が、お前はどっちから来たんだと言った。火事場の方角からいえば向うから来たに違いないのだけれども、家の方角からいえば、こっちから来たに違いない、それで家は向うを出て来たが、火事場はこっちから帰ってきたんだと言ったら、刑事がとにかくそこへ待っていると行ったから、ちようどそこに材木のようなものが積んであるから、そこへかけて待っていた。そして警察へ行くのも面白いなどと考えているうちに、また誰かが引っかかって掴まって来た。そうしたら先生に、もうお前は行っても宜しいと言ったので、せっかく、ち

よつと警察へ行ってみたいなんて考えている時だったから、刑事にもう少しなんなら待っていていましよるかと聞いたら、もうよしよしと言われて帰ってきた。

*

骨董を集めるのが好きで、あるものを買ったが、その字が読めなくて、聞いたたら、専売特許という字だった。

*

たしか正月だったと思うけれど、先生のお膳に栗が付いていた。先生は糖尿病で甘いものはなににも食えないのだ。ところが先生、その栗を食いながら、僕の家内はね、甘い物といえは菓子だけだと思っているんだよ、外のものならかまわないと思ってるんだよって、首を縮めて食っていた。

*

島崎柳塙の話。

*

先生はロダンを山師だと言ひ、モオパスサンを巾着切りみたいな奴だと言つていた。

(談話)

日本文学電子図書館

夏目先生

著 者 芥川龍之介

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 別巻」角川書店

昭和42年10月10日 5版発行



日本文学電子図書館